

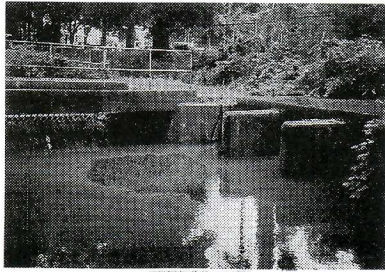
# ねりまの文化財

## 特集 「千川上水現況調査報告」

この報告は、練馬区教育委員会が平成15年7月から10月に実施した、文化財講座「千川上水・田柄用水の現況を調べてみよう」に参加した区民ボランティアの方々が調査し、まとめたものの一部を掲載しました。

### ■ 上流編

(新旧取水口と西武新宿線交差)



現取水口

千川上水の取水口は、創設された元禄時代以後、何度かその位置を変えています。現在の取水口は、五日市街道と境調布

線が交差する境橋交差点の玉川上水右岸「東京都北多摩南部建設事務所武蔵野工区」(武蔵野市境四・11)の敷地内にあります。取水堰は鉄筋コンクリート製で、玉川上水に対して直角に開口しています。創設当時の取水口がどのへんにあったかは、不明です。ただ、武蔵高等学校編『千川上水』(本流)当時の旧取水口跡(明治4年(一八七二)から昭和41年(一九六六)まで使用)は、境橋から約500mほど上流、曙橋から少し遡った小金井堤の左岸に見つけることができます。玉川上水に先端切石積の分水堤が突きだし、その突堤の根元付近に高さ1m 30cmの赤錆たゲートの巻揚器がひっそりと佇んでいます。ところで千川上水研究の基本資料「千川上水路図」を解説した『千川上水路図解説』(千川の会編・クオリ発行)では旧取水口はこのほかにもう一つ

存在すると指摘しています。明治13年(一八八〇)に千川水道株式会社が増設し明治40年(一九〇七)年まで用いられていた取水口で、その遺構は最初の旧取水口から徒歩で90歩ほど上流の、左岸のシユロの茂みの中に残置されています。分水堤は埋もれかかり、その背後に、最初の旧取水口よりやや小さめのやはり赤錆たゲート巻揚器があります。

### 平井家水車

取水堰から取り込んだ水は、五日市街道下り線の道路下に埋められた内径1mのヒューム管を伝って石積み護岸堤の開口から千川上水へ流れ込みます。この開口部真上の堤に、自然石に「千川上水清流の復活」と刻まれた碑が建っています。ここから下流の「伊勢(殿)橋」(練馬区関町南三丁目)までの開渠区間約5kmが、清流の復活区間です。清流は、ここから関前橋(武蔵野市八幡町)まで北東に約2.1km、一直線に流れ下ります。前出『千川上水路図解説』をはじめ諸々の文献には、かつてこの区間の左岸に、二基

練馬区教育委員会  
生涯学習課  
(文化財係)  
☎ 3 9 9 3 - 1 1 1 1  
〒 1 7 6 - 8 5 0 1  
練馬区豊玉北6-12-1

の水車が存在していたことを記しています。水車を創設したのは上保谷新田名主・平井伊左衛門といわれています。伊左衛門は、天保6年(一八三五)、上保谷新田が上保谷村から独立して一村となり、主導的役割を果たし、以後、平井家はこの一帯に大きな影響力を及ぼす一族でした。なんら水車の遺構が残っておらず、水車を営業していた平井家も昭和初めにこの地を離れてしまい、水車の場所を特定することは困難でした。千川上水沿いの鮎店(西東京市新町四丁目)の隣にお住まいの平井一族の平井嘉市氏に水車の件を尋ねると、「二つ目の水車については分かりませんが、上流の水車はこの先の安間(やすま)さん宅にありました」とのことです。同氏の話によると、平井氏宅前から下流の安間氏宅まで約400m水を引き、この用水で水車を回していたとのことです。西東京市新町二・5の安間義明氏によると「終戦(第二次世界大戦)直前に平井家の水車を譲り受け、のちに水力を電力に換え、安間伸銅所として昭和60年代まで経営していました」とのことでした。現在、伸銅所は閉じ、その跡地には自動車販売関係のビルが建っています。水車の遺構について尋ねると「自宅の裏に古い水神様が祀られています」とのことです。拝見させてくださいました。高さ1m余の石祠は全体に苔むし、長い時間の経過を漂わせていました。安間氏宅前の千川上水両岸には20数本のケヤキの高木が整然と並びその中を清

